

No.98 氏家 慶二 —無題—

Keiji Ujiie

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年4月1日付 立川市市報記事より

雲の向こうにそびえる幻の都市のように見えるこの作品は、車止めとして造られている。石の杭くいに載っている小さな家のようにも思えるが、人によっては杭の頂部がデザインされているものに見えるかもしれない。

氏家慶二は石彫の作家で、赤城山腹に大きな犬と一緒に住んでいる。打ち合わせで東京に来るときは、四輪駆動車を駆ってくる。ついせんだっても戦火のレバノン国際彫刻シンポジウムに招待されて、気軽に出掛けていった。つまり行動する自然児なのだ。そのせいか、彼の作品の中には、常に一つの宇宙があって、独特の雰囲気を持っている。

ここでは、石の中に眠っている都市を引っ張り出してみせたようだ。一つの石にも宇宙が宿っている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現:UR 都市機構) 「ミニ通信」より

都市とアートの具体的な関わりの大きな成果として、パリに於けるグランプロジェクトの進行があります。

私が3年前にパリに行った時でも、ワークそのもののスケールの大きさと行政の関わり方の大きさに圧倒されましたが、現在ではもっと数多くの具体的な空間が生み出されている事でしょう。

それは、広大な都市と環境とが情緒的とも呼べる様な関係を築くことであり、都市とも自然とも深く関わるための重要な key となるはずです。

今回のファーレ立川アート計画が、パリとは異なった地点で素晴らしい成果を生み出していくことを期待しています。